

InstallShield 2018 Express Edition リリース ノート

(オリジナル リリース 2018 年 1 月、R2 を含むアップデート リリース 2018 年 9 月)

はじめに.....	2
SP1 での変更点.....	2
SHA1 および SHA256 を使用するデュアル署名のサポート.....	2
新しい機能.....	3
FlexNet Code Aware を使ったオープン ソース リスク評価の実行.....	3
Web アプリケーションのフォーム認証を設定する.....	8
強化機能.....	8
InstallShield 2018 R2 Express Edition	9
定義済みインストール条件の追加	9
[管理者として実行] へのショートカット.....	9
InstallShield 2018 SP1 Express Edition.....	9
アップデート ランチャー名のカスタマイズ.....	9
定義済みパブリック フォルダの指定	9
InstallShield 2018 Express Edition	10
製品構成のセットアップ ファイル名にプロパティの値を含める.....	10
概要情報ストリーム コメントおよびパッケージ ファイル名を設定するための新しい MSBuild パラメーター	11
概要情報ストリーム コメントを設定する新しいパラメーター	11
パッケージ ファイル名を設定する新しいパラメーター.....	12
追加された前提条件	12
Visual C++ 2017 x86 および x64 前提条件	12
Microsoft SQL Server 2014 SP1 および SP2 前提条件.....	12
Microsoft .NET Framework 4.7 前提条件	12
重要な情報.....	13
InstallShield の評価.....	13
InstallShield および InstallShield のアドオンのインストール、および再配布可能ファイルを取得する	13
InstallShield の複数エディションをインストールする.....	14
InstallShield の複数バージョンをインストールする.....	14
[リリース] ビューから [.NET/J#] タブの削除.....	14
プロジェクトのアップグレードに関するアラート.....	14

InstallShield の以前のバージョンで作成されたプロジェクトのアップグレードに関する一般情報	15
ターゲット システムとしてサポートされている Windows のバージョン リストに関する変更	15
文字列のローカライズに関する考慮	15
バグ修正	16
InstallShield 2018 R2 Express Edition	16
InstallShield 2018 SP1 Express Edition	16
InstallShield 2018 Express Edition	18
システム要件	19
InstallShield を実行するシステムの要件	19
ターゲット システムの要件	20
既知の問題	21
法的情報	21

はじめに

InstallShield は、ハイクオリティな Windows Installer ベースのインストールをオーサリングするための業界標準ツールです。InstallShield 2018 Express Edition でデイリー ビルドを簡単にスキャンするだけで、OSS コードに関するリスクを軽減することができます。出荷前に OSS および IP コンプライアンス脆弱性を検出することで、ビルドそのものが将来的な OSS データ違反に対する防衛の最前線となります。

InstallShield 2018 Express Edition では、最新テクノロジーを手軽に使用できる新しい機能と強化内容も提供されています。

SP1 での変更点

InstallShield 2018 Express Edition には、次の新しい機能が搭載されています：

- [SHA1 および SHA256 を使用するデュアル署名のサポート](#)

SHA1 および SHA256 を使用するデュアル署名のサポート

以前のリリースでは、署名ダイジェスト ハッシュ アルゴリズムの選択肢は次に限られていました：

- 証明書ハッシュ
- SHA-1
- SHA-256

InstallShield 2018 SP1 Express Edition では、これらの署名ダイジェスト ハッシュ アルゴリズム以外にも次を選択できます：

- デュアル署名 - (SHA-1 および SHA-256) ダイジェスト

R2 で修正されたバグ

InstallShield 2018 R2 Express Edition で解決された問題については、「[InstallShield 2018 R2 Express Edition](#)」を参照してください。

SP1 で修正されたバグ

InstallShield 2018 SP1 Express Edition で解決された問題については、「[InstallShield 2018 SP1 Express Edition](#)」を参照してください。

新しい機能

InstallShield 2018 Express Edition には、以下のような新しい機能が搭載されています:

- [FlexNet Code Aware を使ったオープン ソース リスク評価の実行](#)
- [Web アプリケーションのフォーム認証を設定する](#)

FlexNet Code Aware を使ったオープン ソース リスク評価の実行

InstallShield には、今回より FlexNet Code Aware との完全な統合が含まれています。FlexNet Code Aware は、製品のセキュリティおよび知的財産 (IP) コンプライアンス リスクを迅速にスキャンする、自動オープン ソース リスク評価およびパッケージ検出ソリューションです。

- [サポート対象ファイル形式](#)
- [FlexNet Code Aware を実行する](#)
- [FlexNet Code Aware レポートの読み方](#)
- [詳細情報](#)

サポート対象ファイル形式

FlexNet Code Aware では次のファイル分析がサポートされています:

- Java パッケージ
- Node パッケージ
- Nuget パッケージ
- RPM パッケージ
- Ruby パッケージ
- EXE & DLL ファイル

セキュリティ脆弱性は、[National Vulnerability Database \(NVD\)](#) と照合されます。

FlexNet Code Aware を実行する

FlexNet Code Aware は、InstallShield の一部であり、アクティベーションの際にアクティベーション ID は不要です。

InstallShield 内部から FlexNet Code Aware を実行するには、InstallShield **[プロジェクト]** メニューから **[FlexNet Code Aware を使ってプロジェクトをスキャン]** をクリックするか、標準ツールバーにある [FlexNet Code Aware] アイコンをクリックしてください。



図 1: InstallShield ツールバー上の FlexNet Code Aware アイコン



メモ この FlexNet Code Aware メニュー オプションは、InstallShield プロジェクトが現在開いていない場合は無効です。

FlexNet Code Aware がプロジェクトのスキャンを完了したとき [Results Summary (結果の概要)] ビューが開いて、スキャン済みファイルの数、オープン ソース パッケージ、ならびに検出された脆弱性の数が表示されます。

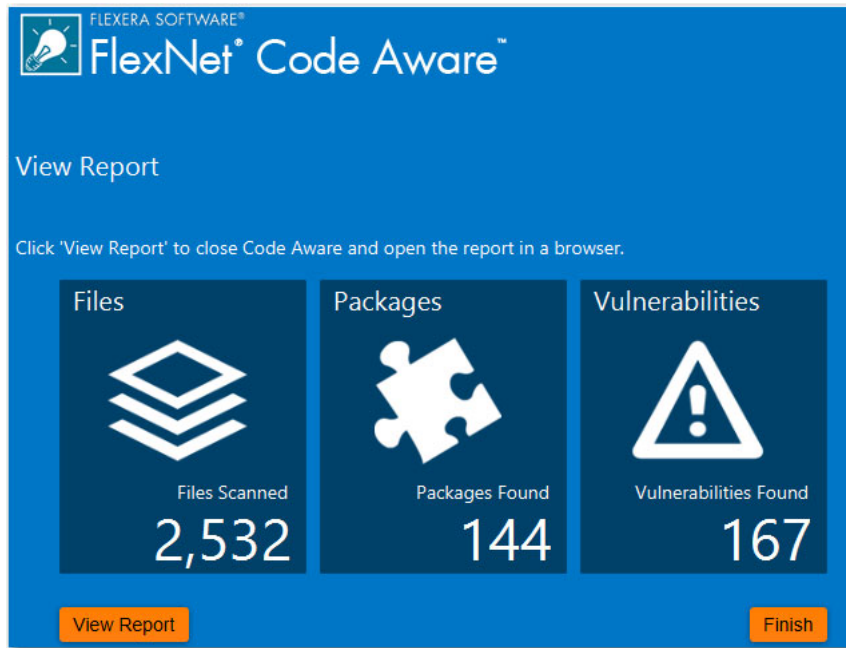


図 2: FlexNet Code Aware 結果の概要

[View Report (レポートを表示)] ボタンをクリックすると、完全なレポートが表示されます。

FlexNet Code Aware レポートの読み方

[Results Summary (結果の概要)] 画面で [View Report (レポートを表示)] をクリックすると、[Initial Summary (初期の概要)] と [Package Inventory (パッケージ インベントリ)] で構成される完全な FlexNet Code Aware レポートが開きます。

[Initial Summary (初期の概要)] ビュー

[Initial Summary (初期の概要)] ビューにはスキャン概要ならびに、運用時のリスク、セキュリティ脆弱性の影響、およびライセンス リスクについての評価が表示されます。

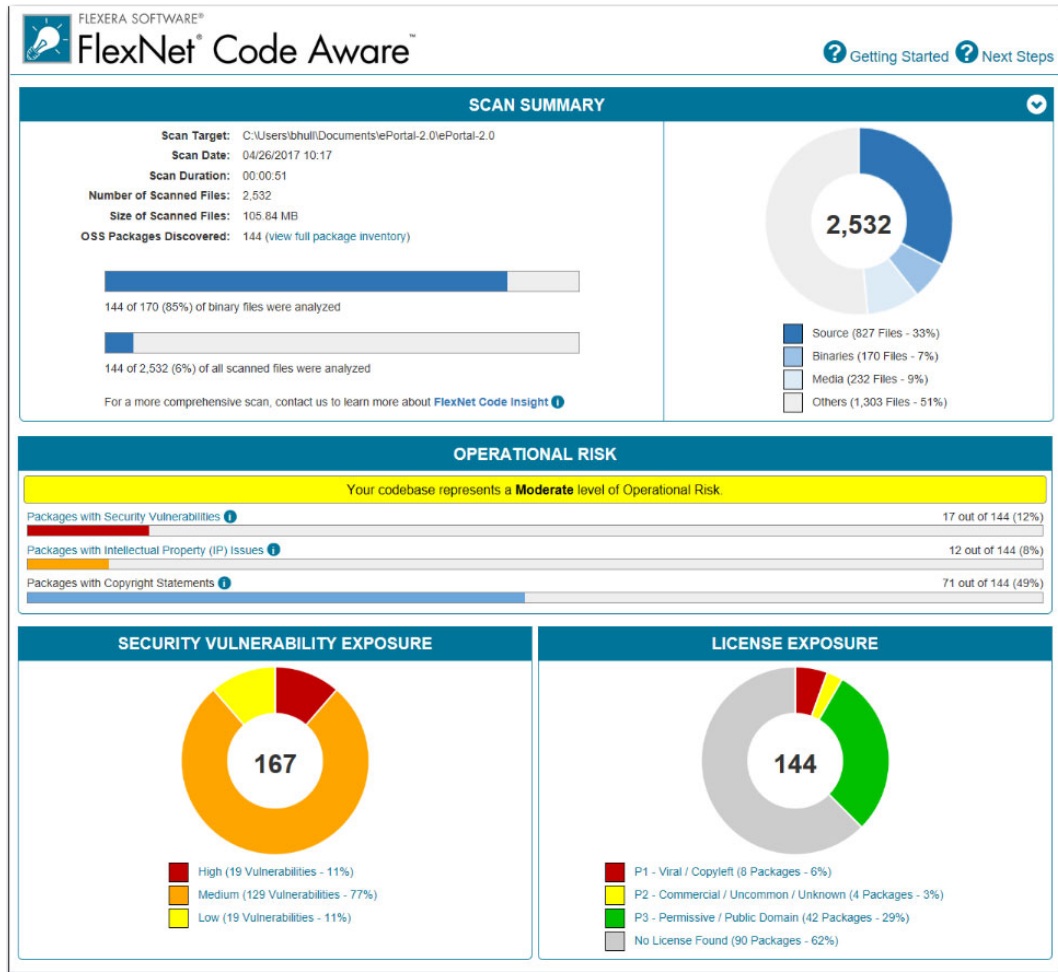


図 3: FlexNet Code Aware [Summary (概要)] ビュー初期画面

FlexNet Code Aware [Initial Summary (初期の概要)] ビューには、次の情報が表示されます:

- **[Scan Summary (スキャン概要)]** – このセクションには、ファイル タイプの内訳、分析済みファイルの割合、および検出数を含む、スキャン済みのコードベースについての詳細が表示されます。
- **[Operational Risk (運用リスク)]** – このセクションには、パッケージと知的財産 (IP) との問題、およびパッケージとセキュリティ脆弱性の組み合わせに基づいた合成リスク評価が表示されます。

- [\[Security Vulnerability Exposure \(セキュリティ脆弱性の影響\)\]](#) および [\[License Exposure \(ライセンスのリスク\)\]](#)—これらのセクションには、識別された問題の種類とカテゴリの内訳が表示されます。

[Package Inventory (パッケージ インベントリ)] ビュー

[Package Inventory (パッケージ インベントリ)] ビューは [Scan Summary (スキャン概要)] セクションで [\[View full package inventory \(フル パッケージ インベントリの表示\)\]](#) をクリックすると表示され、検出されたオープンソースおよびサードパーティ パッケージおよび関連ライセンス、セキュリティ脆弱性、依存関係、ならびに検出された著作権ステートメントの完全リストを表示します。

The screenshot shows the FlexNet Code Aware interface. At the top, there are search filters for keywords, CVEs, and copyright holders. Below these are checkboxes for Security Vulnerabilities (High, Medium, Low) and Detected Licenses (P1, P2, P3, No License Found). A table below lists packages with columns for Package, License, Vendor, Vulnerabilities, and # Copyrights. The table shows various packages like mysql_connector_c and struts, with their respective vulnerability counts and license types.

Package	License	Vendor	Vulnerabilities	# Copyrights
mysql_connector_c 5.1.7	No License Found	Mysql	94 (High) 5 (Medium) 71 (Low) 18 (Other)	None Found
struts 1.2.7	Apache-2.0	Apache	7 (High) 2 (Medium) 5 (Low) 0 (Other)	None Found
spring_framework 3.0.5.RELEASE	Apache-2.0	Pivotal_software	6 (High) 1 (Medium) 5 (Low) 0 (Other)	None Found
spring_framework 3.0.5.RELEASE	Apache-2.0	Springsource	6 (High) 1 (Medium) 5 (Low) 0 (Other)	None Found
spring_framework 3.0.5.RELEASE	Apache-2.0	Pivotal_software	6 (High) 1 (Medium) 5 (Low) 0 (Other)	None Found
spring_framework 3.0.5.RELEASE	Apache-2.0	Pivotal_software	6 (High) 1 (Medium) 5 (Low) 0 (Other)	None Found
spring_framework 3.0.5.RELEASE	Apache-2.0	Pivotal_software	6 (High) 1 (Medium) 5 (Low) 0 (Other)	None Found
spring_framework 3.0.5.RELEASE	Apache-2.0	Pivotal_software	6 (High) 1 (Medium) 5 (Low) 0 (Other)	None Found
spring_framework 3.0.5.RELEASE	Apache-2.0	Pivotal_software	6 (High) 1 (Medium) 5 (Low) 0 (Other)	None Found
spring_framework 3.0.5.RELEASE	Apache-2.0	Pivotal_software	6 (High) 1 (Medium) 5 (Low) 0 (Other)	None Found
spring_framework 3.0.5.RELEASE	Apache-2.0	Springsource	6 (High) 1 (Medium) 5 (Low) 0 (Other)	None Found

図 4: FlexNet Code Aware [Package Inventory (パッケージ インベントリ)] ビュー

[Package Inventory (パッケージ インベントリ)] ビューには、ターゲットのクエリを実行して、一覧を様々なパッケージの種類に絞り込むためのフィルターが用意されています。

追加パッケージの詳細を表示するには、確認したいパッケージの **[Vulnerabilities (脆弱性)]** 列に一覧表示されている脆弱性カウントをクリックしてください。



図 5: [Vulnerabilities (脆弱性)] 列

[Vulnerabilities Detail (脆弱性の詳細)] ページが開き ([Package Inventory (パッケージ インベントリ)] ビューの一部と重なる)、選択されたパッケージの詳細情報が表示されます。

struts 1.2.7 x

Name	struts 1.2.7
Version	1.2.7
License	■ Apache-2.0
Vulnerabilities	■ 7 ■ 2 ■ 5 ■ 0
Description	The core of the Struts framework is a flexible control layer based on standard technologies like Java Servlets, JavaBeans, ResourceBundles, and Extensible Markup Language (XML), as well as various Jakarta Commons packages. Struts encourages application architectures based on the Model 2 approach, a variation of the classic Model-View-Controller (MVC) design paradigm. Struts provides its own Controller component and integrates with other technologies to provide the Model and the View. For the Model, Struts can interact with any standard data access technology, including Enterprise Java Beans, JDBC, and Object Relational Bridge. For the View, Struts works well with JavaServer Pages, including JSTL and JSF, as well as Velocity Templates, XSLT, and other presentation systems. The Struts framework provides the invisible underpinnings every professional web application needs to survive. Struts helps you create an extensible development environment for your application, based on published standards and proven design patterns.
Path	C:\Users\bhull\Documents\Portal-2.0\Portal-2.0\extras\struts-1.2.7\contrib\struts-elib\struts.jar C:\Users\bhull\Documents\Portal-2.0\Portal-2.0\extras\struts-1.2.7\lib\struts.jar
Evidence Type	pom.xml
Maven GAV	struts:struts:1.2.7
Vendor	Apache
Copyrights	None Found

Security Vulnerabilities v

CVE ID: CVE-2006-1547

Severity: ■ High

CVSS Score: 7.8

図 6: 脆弱性の詳細

詳細情報

FlexNet Code Aware の使用にあたっての詳細は、InstallShield ヘルプ ライブラリの「FlexNet Code Aware を使ってオープン ソース リスク評価を行う」を参照してください。

Web アプリケーションのフォーム認証を設定する

InstallShield 2018 Express Edition に、Web アプリケーションでフォーム認証を設定するための新しいオプションが追加されました。この新しいオプション [フォーム認証] は、Web サイトの [IIS 構成] ビューで [認証済みアクセス] セクションの下に表示されます。

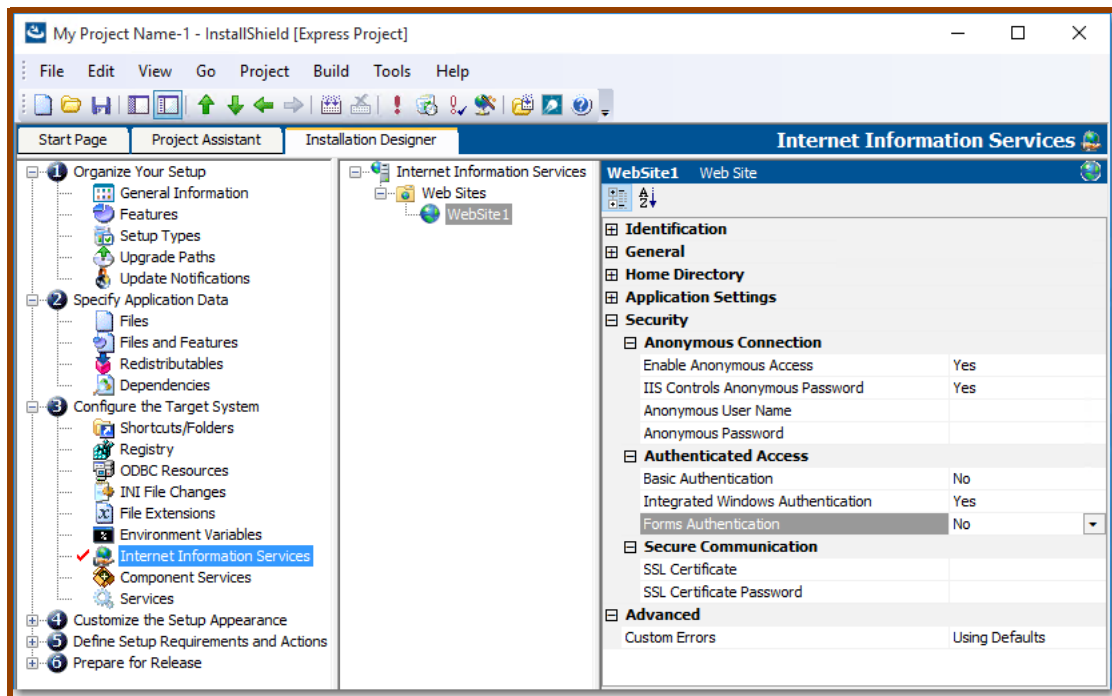


図 7: [IIS 構成] ビューの [フォーム認証] オプション

[フォーム認証] オプションを [はい] に設定してフォーム認証を有効化します。ASP.NET フォームベースの認証は、多くの要求を受け取るパブリック Web サーバー上にあるサイトまたはアプリケーションに適しています。この認証モードでは、オペレーティング システムが提供している認証方法に頼ることなく、アプリケーション レベルでのクライアント登録および認証を管理することができます。



重要 フォーム認証は、Web サーバーにユーザー名とパスワードをテキスト形式で送信します。ホームページ以外のアプリケーション内のすべてのページ、およびログオン ページには、Secure Sockets Layer (SSL) 暗号化を使用してください。



メモ この変更は 10J-1625840 として記録されています。

強化機能

InstallShield 2018 には、以下の強化機能が含まれています:

- [InstallShield 2018 R2 Express Edition](#)
- [InstallShield 2018 SP1 Express Edition](#)

- ・ [InstallShield 2018 Express Edition](#)

InstallShield 2018 R2 Express Edition

InstallShield 2018 R2 Express Edition には、次のような新しい強化機能が含まれています:

- ・ [\[管理者として実行\] へのショートカット](#)
- ・ [定義済みインストール条件の追加](#)

定義済みインストール条件の追加

InstallShield 2018 R2 では今回より、.net 4.7 の定義済みインストール条件を追加することができます:

- ・ [4.7](#)
- ・ [4.7.1](#)
- ・ [4.7.2](#)

[管理者として実行] へのショートカット

InstallShield 2018 R2 では、今回より [管理者として実行] へのショートカットを有効化することができます。

選択可能なオプションは以下のとおりです:

- ・ [はい](#) [管理者として実行] へのショートカットの設定を有効化します。
- ・ [いいえ](#) [管理者として実行] へのショートカットの設定を行いません。

InstallShield 2018 SP1 Express Edition

InstallShield 2018 SP1 Express Edition には、次の強化機能が含まれています。

- ・ [アップデート ランチャー名のカスタマイズ](#)
- ・ [定義済みパブリック フォルダーの指定](#)

アップデート ランチャー名のカスタマイズ

InstallShield SP1 では、アップデート ランチャーの名前をカスタマイズするための新しい設定が追加されています。InstallShield はアップデート ランチャーの名前として、デフォルトで Update.exe を使用します。今回より、名前を指定してアップデート ランチャーを作成することができます。

定義済みパブリック フォルダーの指定

InstallShield では、ユーザーのパブリック フォルダーへの完全パスを保持する新しい定義済みフォルダーが追加されました。

InstallShield 2018 Express Edition

InstallShield 2018 Express Edition には、次のような新しい強化機能が含まれています。

- ・ 製品構成のセットアップ ファイル名にプロパティの値を含める
- ・ 概要情報ストリーム コメントおよびパッケージ ファイル名を設定するための新しい MSBuild パラメーター
- ・ 追加された前提条件

製品構成のセットアップ ファイル名にプロパティの値を含める

InstallShield 2018 Express Edition では今回より、製品リリースのセットアップ名およびパッケージ ファイル名に Property テーブルからのプロパティの値を含めることができます。

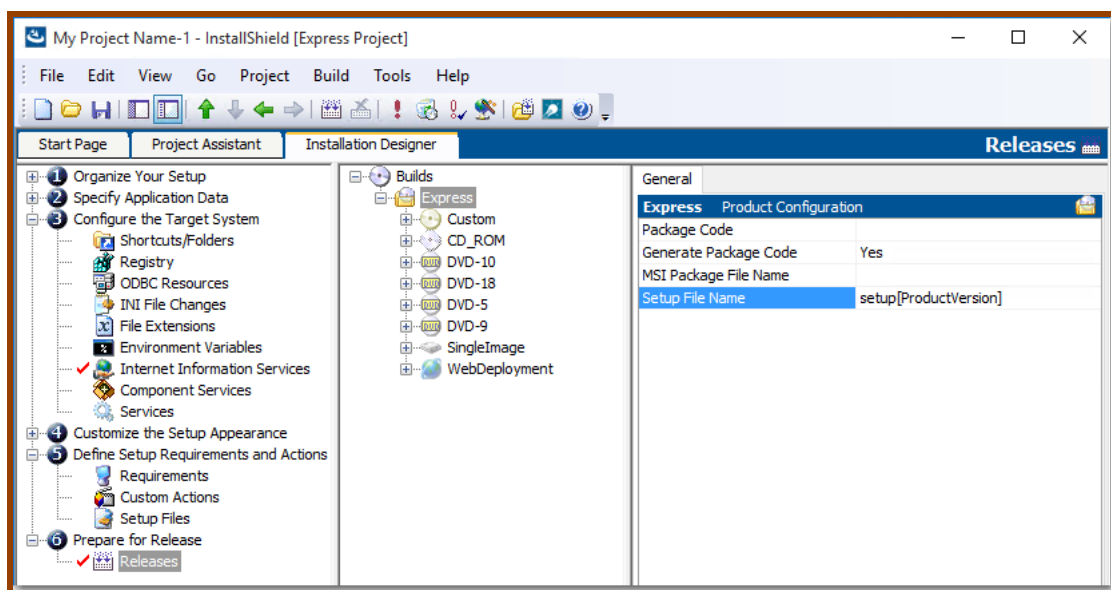


図 8: [リリース] ビューで "セットアップ ファイル名 フィールド" にプロパティを入力する

たとえば、[リリース > Express] ビューの [全般] タブにある "セットアップ ファイル名" または "MSI パッケージ ファイル名" フィールドに次の任意のプロパティを入力することができます:

```
setup[ProductVersion]  
setup[CustomVersion]  
setup[ProductCode]  
setup[ProductCode][ProductVersion]
```

たとえば、"セットアップ ファイル名" フィールドに `setup[ProductVersion]` と入力した場合、セットアップ名が `setup14.10.1234.exe` となります。



メモ この変更は 10J-1764179 として記録されています。

概要情報ストリーム コメントおよびパッケージ ファイル名を設定するための新しい MSBuild パラメーター

InstallShield 2018 Express Editionで今回追加された MSBuild パラメーターを使って、インストーラーにコメントの追加を設定、およびインストーラーのパッケージ ファイル名の設定を行うことができます。

- ・ 概要情報ストリーム コメントを設定する新しいパラメーター
- ・ パッケージ ファイル名を設定する新しいパラメーター

概要情報ストリーム コメントを設定する新しいパラメーター

[一般情報] ビューの “概要情報ストリーム コメント” フィールドでインストーラーにコメントを追加することができます。

InstallShield 2018 express Edition ではまた、ビルド時にコメントを入力できるオプションも追加されています。MSBuild.exe タスクに SummaryInfoComments という名前の新しいパラメーターが追加されました。これを使って、次の例のようにビルド番号を含めるなど、ビルド時に [概要情報ストリーム コメント] を設定することができます。

MSBuild.exe c:\installers\Setup.sln /Property:SummaryInfoComments="ここにコメントを入力"

SummaryInfoComments プロパティを使って追加されたコメントは、ビルド済みのインストーラーの [プロパティ] ダイアログ ボックスで参照することができます。

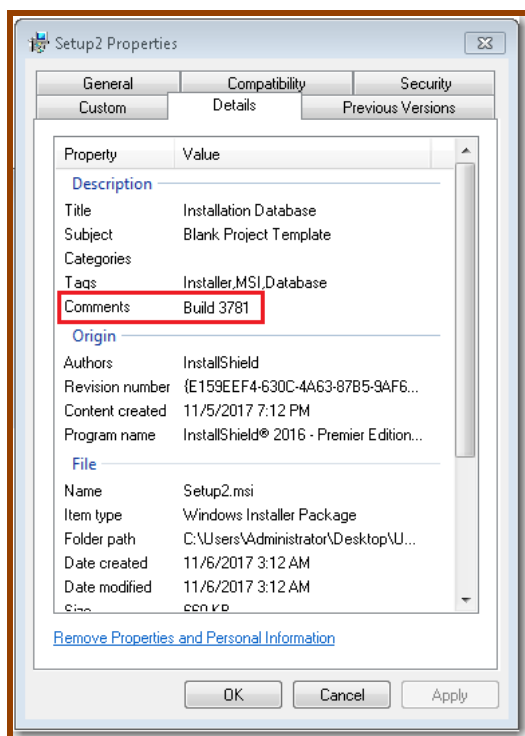


図 9: [プロパティ] ダイアログ ボックスのコメント



メモ この変更は IOJ-1735932 として記録されています。

パッケージ ファイル名を設定する新しいパラメーター

[リリース > Express] ビューで [全般] タブにある "MSI パッケージ ファイル名" フィールドで、インストーラーのパッケージ ファイル名を指定できます。

InstallShield 2018 Express Edition ではまた、パッケージ ファイル名を設定できるオプションもあります。MSBuild.exe タスクに MSIPackageFileName という名前の新しいパラメーターが追加されました。これを使って、次の例のようにビルド時にインストーラーのパッケージ ファイル名を設定することができます。

```
MSBuild.exe c:\installers\Setup.isproj /Property:MSIPackageFileName="MySetup"
```

MSIPackageFileName パラメーターの値を入力するとき、InstallShield が .msi ファイルに使用する (ピリオドまたはファイル拡張子を含まない) ファイル名を入力する必要があります。



メモ この変更は IOJ-1735520 として記録されています。

追加された前提条件

InstallShield 2018 Express Edition には、以下のような追加前提条件が含まれています：

- [Visual C++ 2017 x86 および x64 前提条件](#)
- [Microsoft SQL Server 2014 SP1 および SP2 前提条件](#)
- [Microsoft .NET Framework 4.7 前提条件](#)

Visual C++ 2017 x86 および x64 前提条件

Microsoft Visual Studio 2017 がリリースされたため、InstallShield は今回より、Visual C++ 2017 x86 および x64 の前提条件を含みます。



メモ この変更は IOJ-1832110 として記録されています。

Microsoft SQL Server 2014 SP1 および SP2 前提条件

Microsoft SQL Server 2014 には 2 つのサービス パックがリリースされているため、InstallShield は今回より、Microsoft SQL Server 2014 SP1 および SP2 両方の前提条件を含みます。



メモ この変更は IOJ-1832297 として記録されています。

Microsoft .NET Framework 4.7 前提条件

InstallShield は今回より、Microsoft .NET Framework 4.7 の前提条件を含みます。



メモ: この変更は IOJ-1834933 として記録されています。

重要な情報

InstallShield 2018 Express Edition リリースに関する次の重要な情報に注意してください:

- [InstallShield の評価](#)
- [InstallShield および InstallShield のアドオンのインストール、および再配布可能ファイルを取得する](#)
- [InstallShield の複数エディションをインストールする](#)
- [InstallShield の複数バージョンをインストールする](#)
- [\[リリース\] ビューから \[.NET/J#\] タブの削除](#)

InstallShield の評価

InstallShield のライセンスを購入していなくても、InstallShield をインストールしてアクティベーションを行わず、またはライセンス サーバーに接続せずに一定の期間使用することができます。アクティベーションを行わず、またはライセンス サーバーに接続せずに使用すると、InstallShield は一部の機能が制限された評価モードで起動します。詳細については、「[InstallShield 評価版の機能制限について](#)」を参照してください。評価版の制限は、InstallShield がアクティベートされたとき、またはライセンス サーバーに接続して、そのライセンスがチェックアウトされたときに解除されます。

InstallShield および InstallShield のアドオンのインストール、および再配布可能ファイルを取得する

次のインストールは、[\[InstallShield のダウンロードおよびライセンスの使用\]](#) に記述されている通り、フレクセラ・ソフトウェア製品 & ライセンス センターからダウンロードが可能です:

- InstallShield
- 再配布可能ファイル (例えば、InstallShield 前提条件および InstallScript オブジェクト)
- Standalone Build、および InstallShield MSI ツールなどのアドオン (使用可能な場合)
- FlexNet Licensing Server ソフトウェア (同時接続ライセンスを購入した場合で、組織のライセンスサーバーを設定する必要がある場合)
- スキン カスタマイズ キット
- InstallScript オブジェクトのテンプレート
- InstallShield サービス パック (使用可能な場合)

InstallShield の複数エディションをインストールする

InstallShield 2018 の Premier、Professional、または Express Edition の中から、同じシステム上に同時に 1 つのエディションのみをインストールできます。また、InstallShield 2018 DIM Editor を、InstallShield 2018 の任意のエディションが搭載されている同じマシン上にインストールすることはできません。

Microsoft Visual Studio の統合は 1 回につき InstallShield の 1 バージョンとのみ可能です。システムで最後にインストールまたは修復された InstallShield のバージョンが Visual Studio の統合に使用されます。

InstallShield の複数バージョンをインストールする

InstallShield 2018 Express Edition は、同じマシン上で別のバージョンの InstallShield と共存することができます。

InstallShield 2018 Express Edition Standalone Build は、同じマシン上で別のバージョンの Standalone Build と共存することができます。ほとんどの場合、InstallShield がインストールされているマシン上に Standalone Build がインストールされることはありません。この両方を同じマシン上にインストールして、オートメーション インターフェイスを使用する場合は、InstallShield ヘルプ ライブラリの「*Standalone Build と InstallShield を同一マシン上にインストールする*」トピックに記載されている、特殊な登録とアンインストールの考慮について参照してください。

[リリース] ビューから [.NET/J#] タブの削除

インストール デザイナーの [リリース] ビューにあった [.NET/J#] タブは、もともと .NET 1.1/2.0 and J# 再配布可能ファイルをサポートするために提供されていました。これらの古いテクノロジーは、Microsoft によるサポートも停止されました。これに伴い、InstallShield 2018 Express Edition では [リリース] ビューの [.NET/J#] タブ (並びに関連する [.NET 1.1/2.0 コア言語] と [.NET 1.1/2.0 言語パック] ダイアログ ボックス) が削除されました。

プロジェクトのアップグレードに関するアラート

以下は、InstallShield 2016 および以前のバージョンで作成されたプロジェクトを InstallShield 2018 にアップグレードする際に発生する可能性のある問題についての情報です。また、新しい InstallShield 2018 プロジェクトと InstallShield 2016 および以前のバージョンから InstallShield 2018 にアップグレードされたプロジェクト間の潜在的な動作の違いについてもアラートします。

- [InstallShield の以前のバージョンで作成されたプロジェクトのアップグレードに関する一般情報](#)
- [ターゲット システムとしてサポートされている Windows のバージョン リストに関する変更](#)
- [文字列のローカライズに関する考慮](#)

InstallShield の以前のバージョンで作成されたプロジェクトのアップグレードに関する一般情報

InstallShield 2018 を使って以前のバージョンで作成されたプロジェクトを開くと、プロジェクトを新しいバージョンに変換するかどうかを質問するメッセージ ボックスが表示されます。[変換する] を選択すると、変換が行われる前に、例えば .777 (.ism プロジェクトの場合) または .2016 (.issuite プロジェクトの場合) というファイル拡張子が付加されたプロジェクトのバックアップ コピーが作成されます。以前のバージョンの InstallShield でこのプロジェクトを再度開く場合、元のプロジェクトのファイル名から .777 または .2016 を取り除いてください。InstallShield 2018 プロジェクトを以前のバージョンの InstallShield で開くことはできませんので、ご注意ください。

InstallShield 2016 以前、InstallShield 12 以前、InstallShield DevStudio、InstallShield Professional 7 以前、および InstallShield Developer 8 以前のバージョンの InstallShield で作成された既存プロジェクトを InstallShield 2018 にアップグレードできます。InstallShield MultiPlatform または InstallShield Universal で作成されたプロジェクトは InstallShield 2018 にアップグレードすることはできませんので、ご注意ください。

ターゲット システムとしてサポートされている Windows のバージョン リストに関する変更

スイート以外のすべてのプロジェクトの種類では、Windows XP SP3 および Windows Server 2003 SP2 が、InstallShield で作成されたインストールを実行するターゲット システムに必要な Windows の最小バージョンです。スイート (アドバンスト UI、およびスイート/アドバンスト UI プロジェクト タイプ) の場合、Windows Vista および Windows Server 2008 がターゲット システム上で必要とされる Windows の最小バージョンです。

文字列のローカライズに関する考慮

InstallShield 2016 から、ローカライズ済み文字列の検出と受け渡しに関する変更が行われました。たとえば、無効な文字のまわりに角括弧が付けられたローカライズ済み文字列のコンテンツは、ビルド時の警告またはエラーを引き起こします。そのため、インストールの作成作業中に次の新しい警告やエラーが発生する場合があります。

エラー/警告番号	メッセージ	トラブルシューティング情報
-7355	文字列 %2 の値 %4 は、テーブル %1 列 %3 の検証基準を満たしていません。	この警告は、ローカライズされた文字列が文字列エディター テーブル内の列の検証基準を満たしていない時に発生します。この警告を解決するには、文字列エディター内のフラグされた値を更新してください。
-7354	文字列 %2 の値 %4 は、テーブル %1 列 %3 では使用できません。	このエラーは、ローカライズされた文字列が文字列エディター テーブル内の名前付き列に有効な値が含まれていない時に発生します。このエラーを解決するには、文字列エディター内のフラグされた値を更新してください。

バグ修正

このセクションには、InstallShield の以下のバージョンで修正された顧客の問題が掲載されています:

- [InstallShield 2018 R2 Express Edition](#)
- [InstallShield 2018 SP1 Express Edition](#)
- [InstallShield 2018 Express Edition](#)

InstallShield 2018 R2 Express Edition

このセクションには、InstallShield 2018 R2 Express Edition で修正されたカスタマーの問題が掲載されています:

問題番号	問題の概要
IOJ-1875224	[ダイアログ] ビューで [インストールの準備完了] ダイアログの選択を解除したとき、InstallShield IDE が例外 c0000005 を発生して終了する問題。
IOJ-1875922	InstallShield 2018 SP1 では、括弧で囲まれている任意の情報をメイン ウィンドウ (たとえば、[編成]、[アプリケーション データ]、[システム構成]) で 2 度目にクリックした時に文字化けが発生する問題。
IOJ-1872837	* および ? を含む文字列エントリに短いファイル名が生成されない問題。
IOJ-1883924	パッチ デザインが、圧縮済み Setup.exe を圧縮解除しない問題。
IOJ-1877004	64 ビットのアウト プロセス .NET サーバーから COM 抽出を行うと、ビルドおよび RegSpyUi.exe がフリーズする問題。

InstallShield 2018 SP1 Express Edition

このセクションには、InstallShield 2018 SP1 Express Edition で修正されたカスタマーの問題が掲載されています:

問題番号	問題の概要
IOJ-1853555	swidtag の署名にストア証明書を使うとビルド エラーが発生した問題。
IOJ-1862582	InstallShield 2018 Express でフォント (色、スタイル、またはサイズ) の変更が不可能だった問題。セットアップ ウィンドウのフォント (色、スタイル、またはサイズ) の変更機能が予期しない動作を行った問題。
IOJ-1860906	プロジェクトを開いた状態、または閉じた状態で、[ツール > オプション > 前提条件] タブを選択してから検索する前提条件の一覧に新しいフォルダーを追加すると、フィールドが空白になる問題。

問題番号	問題の概要
IOJ-1860620	InstallShield プロジェクトを VS ソリューションに追加したとき、MSBuild を使ってソリューションをビルドするとエラーが発生した問題。
IOJ-1842874	セットアップが完了すると Temp フォルダー内のすべてのファイルがクリーンアップされるが、機能前提条件を含む単一メディアの場合、Temp フォルダーに 2 つの setup.exe が残された問題。
IOJ-1731438	InstallShield IDE の [レジストリ] ビューで DWORD の値として表示する項目に制限があった問題。2147483647 以上の数値を入力すると、16 進数 0x7FFFFFFF が IDE で 0x7FFFFFFF と表示されました。
IOJ-1665230	レジストリから INSTALLDIR を設定すると、レジストリの 64 ビット部分を検索せず、X64 の場所から読み込む必要があった問題。

InstallShield 2018 Express Edition

このセクションには、InstallShield 2018 Express Edition で修正されたカスタマーの問題が掲載されています。

問題番号	問題の概要
IOJ-1627091	InstallShield プロジェクトを MSBUILD でビルドしたとき、依存関係ファイルが InstallShield パッケージに含まれません。ただし、同じプロジェクトを Visual Studio インターフェイスを使ってビルドした場合、依存関係ファイルが含まれます。
IOJ-1749409	不完全な DLL 上で InstallShield を使った COM 抽出を行ったとき、登録処理中に無限ループが発生する問題。InstallShield はプロセスを停止する代わりに無制限にハングし、一定時間が過ぎた後エラーメッセージを表示します。
IOJ-1813258	Microsoft SQL Server 2016 Express 前提条件のダウンロードが失敗する問題。
IOJ-1830045	InstallShield 2016 SP2 でアップデートを確認すると、Software Manager がアップデートが使用できない旨のメッセージを表示する代わりに「この製品バージョンはサーバーに登録されていません」というメッセージが表示される問題。
IOJ-1842270	SETUPEXEDIR が InstallShield 前提条件に渡されたとき、予期している値に解決されない問題。
IOJ-1846227	<p>Msvcp140.dll ファイルの代わりに Microsoft Visual C++ 2015 Update 3 再配布可能ファイルの条件としてレジストリ規則の使用を要求すると、不安定な結果となる問題。</p> <p>現在インストールされているバージョンは次のキーに格納されています：</p> <pre>HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE[Wow6432Node]\Microsoft\VisualStudio\vs-version\VC\Runtimes{x86 x64 ARM}</pre> <p>たとえば、C++ 2015 Update 3 x86 の格納場所：</p> <pre>HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Wow6432Node\Microsoft\VisualStudio\14.0\VC\Runtimes\x86\Version=v14.0.24212.00</pre> <p>詳細については、「Redistributing Visual C++ Files (Visual C++ ファイルの再配布)」を参照してください。</p>

システム要件

このセクションでは、InstallShield で作成されたインストールを実行するターゲット システム (ランタイム環境) の要件、ならびに InstallShield を実行するために必要なシステム (オーサリング環境) の要件が説明されています。

InstallShield を実行するシステムの要件

InstallShield は、これらのオペレーティング システムの最も新しいパッチおよびサービス パックが適用されている最新版で実行します。

項目	説明
プロセッサ	Pentium III クラスの PC (500 MHz 以上を推奨)
RAM	256 MB の RAM (512 MB 推奨)
ハードディスク	750 MB 空き領域
ディスプレイ	1024 x 768 (XGA) 以上の解像度
オペレーティング システム	<ul style="list-style-type: none">Windows VistaWindows Server 2008Windows 7Windows Server 2008 R2Windows 8Windows Server 2012Windows 8.1Windows Server 2012 R2Windows 10Windows Server 2016
権限	システムの管理者権限
マウス	Microsoft IntelliMouse、またはその他の互換性があるポインティング デバイス

項目	説明
InstallShield と Visual Studio との統合 (オプション)	<p>Microsoft Visual Studio の以下のバージョンを InstallShield Premier Edition または Professional Edition に統合することができます:</p> <ul style="list-style-type: none"> • Visual Studio 2008 • Visual Studio 2010 • Visual Studio 2012 • Visual Studio 2013 • Visual Studio 2015 • Visual Studio 2017 <p>Visual Studio のこれらのバージョンの以下のエディションは、InstallShield Premier または Professional Edition に統合することができます:</p> <ul style="list-style-type: none"> • Community • Professional • Premium • Ultimate

ターゲット システムの要件

ターゲット システムは、次のオペレーティング システムの最小要件を満たさなくてはなりません:

- Windows XP SP3
- Windows Server 2003 SP2
- Windows Vista
- Windows Server 2008
- Windows 7
- Windows Server 2008 R2
- Windows 8
- Windows Server 2012
- Windows 8.1
- Windows Server 2012 R2
- Windows 10
- Windows Server 2016

ターゲット システムで、SSE2 インストラクション セットがサポートされていることが必須です。

既知の問題

既知の問題一覧はhttps://flexeracommunity.force.com/customer/articles/en_US/INFO/InstallShield-2018-Express-Edition-Known-Issues をご覧ください。

法的情報

著作権情報

Copyright © 2018 Flexera

この出版物には、Flexera およびそのライセンサーによって所有されている機密情報、創造的な製作物が含まれています。本出版物の一部または全部を、Flexera からの事前の書面による明示的許可なしに、使用、複製、出版、配布、表示、改変または転載することはいかなる形態または手段を問わず厳重に禁止いたします。Flexera によって書面で明示されている場合を除き、この出版物の所有は、禁反言、黙示などによっても、Flexera が所有するいかなる知的財産権の下、ライセンスまたは権利を一切付与するものではありません。

本技術およびそれに関する情報のすべての複製は、Flexera より許可されている場合に限り、著作権および所有権に関する通知を完全な形で表示しなければなりません。

知的財産

Flexera が所有する商標および特許の一覧は、<https://www.flexera.com/producer/company/about/intellectual-property/> を参照してください。Flexera 製品、製品ドキュメント、およびマーケティング資料で言及されているその他すべてのブランドおよび製品名は、各社の商標または登録商標です。

(米国内向け) 制限付権利に関する表示

本ソフトウェアは商業用コンピュータ ソフトウェアです。本ソフトウェアのユーザーまたはライセンス許可対象者が米国政府の代理、部署、その他の関連機関の場合、ソフトウェアまたは技術データおよびマニュアルを含むすべての関連文書の使用、複写、複製、開示、変更、公開、または譲渡に関して、ライセンス契約または本契約の条項ならびに民生機関については連邦調達規則第 12.212 条または軍事機関については国防連邦調達規則補遺第 227.7202 条による制限が適用されます。本ソフトウェアは完全に自費で開発されたものです。その他一切の使用は禁止されています。